

KCELS

News letter No.21
MARCH 2006

第30回神戸女学院大学英文学会(KCELS)大会報告

吉田 純子

穏やかな晩秋の11月25日の午後、文学館28号教室にて、第30回目のKCELSの大会が開催されました。今回は、30回目の大会を記念して、泥谷征人教授に「過去の活動をふり返って」という題でご挨拶をいただき、その後、例年通りの研究発表と特別講演というプログラムになりました。

特別講演では、中・四国アメリカ文学会会長、中・四国アメリカ学会会長、中・四国イギリス・ロマン派学会会長、日本エミリー・ディキンソン学会会長を歴任され、現在、広島大学名誉教授および広島市の比治山大学副学長・教授であられる稲田勝彦先生を講師にお迎えしました。稲田先生には、「読みとジェンダー」という題で、男性学の視点からWalt Whitman, Robert Frost, J. D. Salinger, Raymond Carverなどのアメリカ文学の読みについて、ご講演をいただきました。「女性のジェンダー意識の変化に伴って、〈女の目で読む〉ということはもう十分と言ってよいほど行われてきました。では男性の場合はどうか」と、男性の視点から文学テキストを読むことの意義を語っていただきました。

今回、文学館28号教室を埋め尽くす多数の参加者があり、「たいへん分かりやすい、興味深い講演を拝聴させていただいた」旨の感想が、参加者の中から寄せられました。また、本学英文学科の専門科目Gender and Literatureの受講生も参加しました。稲田先生がご講演で、この科目と共通のトピックである*The Catcher in the Rye*を取り上げられたこともあって、別視点からの分析を興味深く拝聴しました。

研究発表の部では、本学大学院文学研究科英文学専攻の博士後期課程1年次在籍の堀場たまきさんが“Telicity of Psych-predicates”という題で心理構文について発表され、また、本学大学院文学研究科英文学専攻の博士後期課程3年次在籍

の高木範子さんは、「ヴィクトリア朝絵画におけるシェイクスピアの男装のヒロイン」という題で、シェイクスピアの男装のヒロイン像についての文化論研究を発表されました。

稲田勝彦先生のご講演を始めとする文学、文化、言語の研究発表を、晩秋のゆるやかな時の流れの中で拝聴させていただき、大変有意義な一日を過ごさせていただきました。

読みとジェンダー

稲田 勝彦

はじめに

読むという行為において読み手のジェンダーが大きな意味を持つということを否定する人は今やいないでしょう。女性のジェンダー意識の変化に伴って「女の目で読む」ということはもう十分と言ってよいほど行われてきました。では男性の場合はどうでしょうか。そもそも男性のジェンダー意識の変化はあったのでしょうか。まずこれを考えてみます。

次に、ジェンダーのもっとも直接的な表われが「男らしさ」「女らしさ」の概念・規範であるという前提に立ってアメリカの作家・作品を見てみると、その多くが、たえず変化し、常に現実からは遠い「真の」「男らしさ」「女らしさ」を問題としていることがわかります。これを4人のアメリカ男性作家について考えます。



1. ジェンダー意識の変化

20世紀後半の女性運動・フェミニズムの過程で、女性のジェンダー意識がどのように変わったかについてはもう触れる必要はないでしょう。問題は男性のジェンダー意識の変化です。私はある方法で日本の大学生のジェンダー意識に関する調査をしたことがあります。それによると、たとえば男は「傷つきにくい、感情的でない、攻撃的である、競争を好む、外見にこだわらない、自立している」など、伝統的に男性の特性と考えられてきたものに対して、特に男子学生が「そうは思わない」と否定的な傾向を示しました。アメリカの詩人ロバート・ブライは、*Iron John: A Book of Men*(1990)の中で、アメリカの若い男性は「ソフト」になったと言いましたが、どうやら男性の「ソフト化」は世界的な傾向だと言ってよいようです。では男性のこのようなジェンダー意識の変化は、彼らの文学の「読み」にどのように作用するのでしょうか。

2. ウォルト・ホイットマン (Walt Whitman, 1819-92)

『草の葉』(*Leaves of Grass*, 1855)で知られるホイットマンは、すべての男女を分け隔てなく受け入れるというその宇宙的人間像によって多くの男女の読者に感銘を与えてきました。しかし、彼が「人間」という名において表明する確信は、ジェンダーの視座に立ってみると、「男」の確信そのもののように見えます。彼の男性詩人としての自信は、時として過度の性的攻撃性として表われます。たとえば「アダムの子どもたち」の中の「君ら女たちよ、逃げようたって放すものか、ぼくは君らに善いことをしてやるんだ」「この国のためにふさわしい息子と娘を生みつけるための原液を注ぎ出し」「どんなに懇願しても耳をかさぬ」などの詩行を読む時、このレイプさえ連想させる性行為の描写にへきえきする女性読者あるいは「ソフト」な男性読者がいるかもしれません。

3. ロバート・フロスト (Robert Frost, 1874-1961)

フロストの長編物語詩「雇人の死」“*The Death of the Hired Man*” (1914)は、ウォレンという農夫とその妻メアリーがサイラスという年老いた雇人を受け入れるかどうかで対立する物語です。実際の、確信的、厳格で、男の正義を主張する夫は、サイラスを受け入れないと言います。彼はいわば検事なのです。これに対して妻は、理解、同情、

女の慈悲を示し、彼を受け入れるべきだと主張します。彼女は弁護士ということになります。被告人であるサイラスが家の中で死んでいたことがわかったところでこの物語は終わるわけですが、ジェンダーを持ち込んでみると、この夫婦には伝統的な「男らしさ・女らしさ」あるいは性役割が均衡を保ちつつ見事に集約されていることがわかります。しかし、今日の「ソフト化」した男性読者は検事役よりも弁護士役に共感を覚えるのではないでしょうか。

4. J.D. サリンジャー (J.D. Salinger, 1919-)

サリンジャーの『キャッチャー・イン・ザ・ライ』(*The Catcher in the Rye*, 1951)の標準的解釈は、「半ば大人の世界に足をふみ入れた少年が、狼狽な世界に傷つき、反逆者として不良じみた虚勢をはり、自我をすりへらしていく、そうした危険な青春の姿を描くと共に、自己犠牲もいとわぬ若い清純な魂と、絶対を求めるはげしい心情を表現している」というものですが、私はこれをただ単に「大人の世界」に足をふみ入れる少年の物語としてではなく「大人の<男>の世界」に入らなければならない思春期の少年の葛藤の物語として読みます。主人公ホールデン・コールフィールドは、結局、「男」になりたくなかったのです。しかし、彼は「男」にならないことをうしろめたく、屈辱的であるとさえ思わずにはいられないほど十分に伝統的な「男らしさ」の概念を刷り込まれていました。彼は自分の中にある「女らしさ」の属性が「男」の世界では通用しないことを知っていたにちがいません。もしフェミニズムを経たあとの男性運動が、男性に「男らしくあること」の無益さと弊害を悟らせ始めたというのであれば、『キャッチャー』は1950年代という時代が書かされた物語だということができるといえるでしょう。

5. レイモンド・カーヴァー (Raymond Carver, 1938-88)

詩人・短編小説家カーヴァーは、その年齢を考えると、ちょうど『キャッチャー』の主人公ホールデンの後身であると言ってよいようです。カーヴァーの小説や詩のテーマを詳細に見てみると、60・70年代のアメリカにおける男女関係や家族の変貌の中でもみくちやにされる男の姿が浮かび上がってきます。たとえば、「深刻な話」“*A Serious Talk*”という短編では、別れた妻の家に来てねちねちと陰湿な嫌がらせをする中年男バートが出て

きますが、村上春樹が言うところの「情けない男」の極めつきであるパートは、60年代以降の変化する男女関係の中の「墮ちた」男なのです。仮に、将来、伝統的な男らしさの概念が完全に消滅してしまった時代が到来したとしましょうか。その時には「深刻な話」のような物語は成立しえなくなるか、面白さが半減するにちがひありません。カーヴェーのこんなたぐいの短編や詩は、60年代以降の「男らしさ」が神話になる過渡期にこそ精彩を放つとも言えるのでしょうか。

Telicity of Psych-Predicates

堀場 たまき

神戸女学院大学大学院博士後期課程

心理動詞にはES型 *fear* 類とEO型 *frighten* 類があり、経験者(Experiencer)の統語位置が異なる。これはθ役付与一様性の仮説(Baker:1988)に違反する。Pesetsky(1995)は心理動詞に三つの項(Causer, Experiencer, Target/Subject Matter)を設定しこの仮説を保持した。ではEO型心理構文 *The article angered Bill(*at the government)* においてTarget項である前置詞句が具現できないのは何故か。Causer項はT/SM項と共起しないというT/SM制限をたてるが反例もあり十分ではない。本論ではT/SM制限にかわる前置詞句具現の条件を動詞句のアスペクト(相)から考察する。

アスペクトとは動詞句の表す時間の観念を線で捉えるもので、開始/継続/終了の三つの局面がある。未完了事象は *for X minutes* と、終点のある完了事象は *in X minutes* と共起する。

- (1) John ran for/*in an hour.
- (2) John ran to the store *for/in ten minutes.
- (3) The dog frightened the thief for/*in ten minutes.

EO型心理動詞文(3)は、誰か/何かの存在を知覚し(原因)それを知覚している間のみ経験者が特定の心理状態にあることを表す。これは未完了のステージレベル状態を示し、知覚動詞 *see* と並行して捉えることができる。語彙概念構造で表示すれば[x CAUSE [y BE AT FRIGHTENED]]となり、地点ATは定項でしめられて前置詞句具現の余地はない。しかし経験者の今後の行動を示唆する起動の前置詞句 *away/to~/out of~/into~ing* など

はEO型心理動詞文に共起可能である。

- (4) The dog frightened the thief away *for/in ten minutes.

一時的な心理状態にある経験者がそこから離脱のため別の地点に向かう。つまり *frighten* という出来事が限定され完了事象となり *in X minutes* と共起する。他動詞の目的語に初期状態から100%の状態変化をもたらしたといえる。本論で、事象を完了事象として限定し経験者に100%の状態変化をもたらすものという前置詞句制限を提唱する。

ヴィクトリア朝絵画における

シェイクスピアの男装のヒロイン

高木 範子

神戸女学院大学大学院博士後期課程

シェイクスピア劇は時代により様々な変容を遂げて現在に受け継がれてきたが、シェイクスピア作品を描いた絵画も同様に時代により描かれ方が異なる。本発表の目的は、シェイクスピアの男装のヒロインがヴィクトリア朝絵画のなかでどのように解釈し直され、表現されたのかを考察することにあつた。男装のヒロインが18世紀より女性らしく、また幼く描かれている段階を追って分析し、これらの絵画が19世紀英国社会によっていかに利用されたのかを検証した。

はじめに、19世紀に描かれた男装のヴァイオラが帯びている女性性を、当時の身体上の性差の概念や、理想とされた女性の内面や顔の造作、髪の色というジェンダーの観点から分析した。ヴィクトリア朝のシェイクスピアの男装絵画には、当時信じられていた生物学的性差や女性らしさの概念が投影された。社会の抑圧からの解放手段の一つとされている男装を施したヒロインは、19世紀絵画において逆に窮屈なジェンダーに縛られているのである。

次に、18世紀末から19世紀にかけてのイモージェンの絵画を考察した。女性の体のしくみについての当時の認識や、弱々しい女性性への憧れというジェンダーの観点から論じ、男装をしているはずのイモージェンが多く絵画のなかで仮死状態の女性の姿をとる理由を導き出した。画家はイモージェンを幼く描くことに飽き足りず、男装という設定を覆した上彼女の仮死という最も衰弱した

姿を描き、女性のか弱さを極限まで強調したのである。

19世紀半ばに自らの権利を主張する女性たちが男性優位の社会秩序に挑もうとする傾向を見せ始めたので、当時の男性たちは危機感を覚え、科学者は男性の優位性を保つため女性を未熟な性と位置付けた。この時代に男装のヒロインを少しも男性らしく描くことができなかつたのは、明確な性差の概念があったからである。人を道徳的に教化する役割を絵画に担わせた時代のシェイクスピアの男装絵画は、両性の相違を表す道具となり、中産階級の女性のあり方を教え導いたと言えよう。

キャンパスニュース

<2006年4月より就任>

David McCullough 専任講師 新任
Ryan Klint 専任講師 新任

<所属変更>

魚住香子氏 2005年4月より、神戸国際大学経済学部契約専任講師
石川有香氏 2005年4月より、国立大学法人名古屋工業大学大学院助教授

<訃報>

元KCELS会員 林和仁氏が2005年6月2日享年59歳でご逝去されました。林先生は、元本学教授でいらっしゃいました。天上の平安をお祈り申し上げます。

国際学会発表

* 別府恵子氏

イタリア、ヴェニスで開催された国際ヘンリー・ジェイムズ学会 Tracing Henry James Conference (2005年7月12-15日) にて研究発表。

* 東森勲氏

ニュージーランド、Auckland大学で開催された 2005 New Zealand Linguistics Society Conference (2005年11月17-18日) にて研究発表。

* 平井雅子氏

アメリカ、サンタフェで開催された10th International D. H. Lawrence Conference (2005年6月26-7月1日) にて研究発表。

* 石川有香氏

アメリカ、Brigham Young Universityで開催されたThe Foreign Language Education and Technology Conferences (2005年8月5-10日) にて研究発表。

シンガポール、The M Hoteで開催されたthe 2005 biennial conference of the Asian Association for Lexicography (ASIALEX) (2005年6月1-3日) にて研究発表。

* 泉川泰博氏

ホノルルで開催されたInternational Studies Association (2005年3月1-5日) の年次学会にて研究発表。

* 栗栖和孝氏

アメリカ、カリフォルニア大学で開催されたThe 32nd Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society (2006年2月10-12日) にて研究発表。

* 難波彩子氏

イタリアで開催されたThe 9th International Pragmatics Conference (2005年7月10-15日) にて研究発表。

* 奥本京子氏

スペイン、ゲルニカで開催された Guernica Peace Museum Foundation V International Peace Museum Conference (第5回国際平和博物館会議) (2005年5月1日-6日) にて研究発表。

* 津田ヨランダ氏

韓国、ソウルで開催されたWomen's Worlds 2005 (2005年6月19-24日) にて研究発表。

韓国、ソウルで開催されたUNESCO Country Report (2005年12月1-2日) にて研究発表。

アメリカ、ボストンで開催されたHarvard Regional Studies Program (2006年3月11日) にて研究発表。

* 鶴野ひろ子氏

イタリア、ラパッコで開催されたThe 21st Ezra Pound International Conference (2005年7月4-7日)にて研究発表。

* 山田由美子氏

ハワイ、ホノルルで開催された4th Hawaii International Conference on Arts and Humanities (2006年1月11-14日)にて研究発表。

* 吉田純子氏

アイルランド、ダブリン、Trinity Collegeで開催されたInternational Research Society for Children's Literature Conference (2005年8月13-17日)にて研究発表。

大学院生による学会発表

* 角谷由美子氏

韓国、サンデホテルで開催された第13回日韓美学研究会 (2005年8月7日)にて研究発表。

* 高木範子氏

KKR広島で開催された中国四国イギリス・ロマン派学会第27回大会 (2005年6月11日)にて研究発表。

神戸女学院大学で開催された文芸学研究会第23回研究発表会 (2005年7月23日)にて研究発表。

日本女子大学で開催された第44回シェイクスピア学会 (2005年10月9日-10日)にて研究発表。

記念賞

2005年度、以下の英文学科学生に対して、次の学内の記念賞が授与されました。

大沢幸恵記念賞	E03014	道野 渚
デフォレスト記念賞	E03177	安田 恵美
アメリカン・ボード記念賞	E03175	山脇 野枝
大島初枝記念賞	E04037	今岡 亜美

会員による出版紹介

◇橋本登代子氏 『感動愛の物語11章』(共著、ひょうたん書房、2005年6月刊)

◇平井雅子氏 *D. H. Lawrence: Literature, History, Culture* (共著、国書刊行会、2005年刊)

◇平井雅子・和氣節子氏 『今日の世界と文学 -WHAT IS THE MEANING OF LITERATURE TODAY?-』(監修、大阪教育図書、2006年刊)

◇石川有香氏 『広げる知の世界 大学でのまなびのレッスン』(共著、ひつじ書房、2005年6月刊)
『フェミニズム言語学の視点に基づく英語性差別表現研究』(単著、雄松堂出版、2005年6月刊)

◇泉川泰博氏 報告書『G・W・ブッシュ政権期の日米安保資料集』(共著、日本国際問題研究所、2005年刊)

◇立石浩一氏 『日本を伝える英語で折り紙』(共著訳、ナツメ社、2005年4月刊)

◇鶴野ひろ子氏 『記憶の宿る場所ーエズラ・パウンドと20世紀の詩ー』(共編著、思潮社、2005年10月刊)

◇山田由美子氏 *Cervantes in the English Speaking World* (共著、Edition Reichenberger、2005年11月刊)
『「ドン・キホーテ」事典』(共著、行路社、2005年12月刊)

◇吉田純子氏 *Adaptation as a Strategy of Children's Literature* (共著、e-book:<http://liternet.bg/ebook/adaptaciata/index.html>, 2005年12月刊)

Adaptation as a Strategy of Children's Literature (共著、Provddiv UP、2005年刊)

神戸女学院大学英文学会講演

回	年月日	講演者と演題
第1回	1976. 11. 05	島田謹二 (東洋大学教授) 「フランスにおける英文学研究」
2	1977. 11. 11	今村茂男 (ミシガン州立大学準教授) 「日本人は英語に弱いのか」
3	1978. 11. 10	菅 泰男 (京都大学教授) 「日本と英文学」
4	1979. 11. 09	大橋健三郎 (東京大学教授) 「アメリカ小説と今日の文学」
5	1980. 11. 12	Margaret Drabble (作家) “Lawrence, Hardy and Bennett: Tragedy or Misery in the Novel”
6	1981. 11. 06	安東伸介 (慶応大学教授) 「中世英文学における女性像」
7	1982. 11. 12	Doris Lessing (作家) “Contemporary British Novelists and Their Tradition”
8	1983. 11. 25	Philip Collins 氏 “Dickens and the Dramatic”
9	1984. 12. 07	寺澤芳雄 (東京大学教授) 「英訳聖書の伝統—言語と文体を中心に」
10	1985. 11. 15	亀井俊介 (東京大学助教授) 「マーク・トウェイン—自然児の運命」
11	1986. 10. 31	Philip Collins (Leicester大学名誉教授) “The Two Voices: Dickens and Tennyson as Spokesmen”
12	1987. 11. 06	池上嘉彦 (東京大学教授) 「こどものことばと詩のことば」
13	1988. 12. 09	佐藤宏子 (東京女子大学教授) 「十九世紀アメリカ女性作家を“読む” —ストウとオルコットを中心に」
14	1989. 12. 05	高橋康也 (東京大学教授・日本英文学 会会長・日本シェイクスピア協会会長) 「ネコと文学」
15	1990. 11. 09	安井 稔 (東北大学名誉教授) 「曖昧な文について」
16	1991. 11. 15	明石紀雄 (筑波大学教授) 「田園の理想の中の軋み—奴隷制についての ジェファソンの終末論的ヴィジョン—」
17	1992. 11. 13	H. M. Daleski (Jerusalem大学教授) “Foreshadowing and Echoes : Conrad, Joyce and Lawrence in Thomas Hardy”
18	1993. 11. 12	国広哲弥 (東京大学名誉教授・神奈川大学教授) 「英語表現の諸相」
19	1994. 11. 11	金関寿夫 (東京都立大学名誉教授・ 城西国際大学短大部招聘教授) 「ネイティヴ・アメリカンズの口承詩について」
20	1995. 12. 08	青山誠子 (青山学院大学教授) 「シェイクスピア劇のダイナミズム —英国文化から世界文化へ」
21	1996. 12. 06	Sheila Ramsey (国際基督教大学) “Creating Intercultural Partnerships: A Necessity in the Twenty-First Century”
22	1997. 12. 05	村山淳彦 (東京都立大学教授) 「ドライサーの女たち」
23	1998. 12. 11	小池 滋 (東京女子大学教授) 「ディケンズと大都市ロンドン」
24	1999. 12. 10	河上誓作 (大阪大学教授) 「アイロニーの言語学」
25	2000. 12. 01	金城盛紀 (桃山学院大学教授、本学名誉教授) 「シェイクスピアとオペラ」 解説 津上智実 (本学音楽部教授) 「シェイクスピアとオペラ」 解説
26	2001. 12. 07	別府恵子 (松山東雲女子大学学長、本 学名誉教授、日本アメリカ文学会会長) 「もうひとつのジャズエイジー —女性詩人たちと1920年代」
27	2002. 12. 06	安斎育郎 (立命館大学国際平和ミュージ アム館長、立命館大学国際関係学部教授) 「日本は世界平和にどう貢献できるか」
28	2003. 12. 05	由本陽子 (大阪大学言語文化部助教授) 「動詞の語形成と概念構造」
29	2004. 11. 26	吉田幸子 (広島女学院大学教授) 「スチュアート朝の仮面劇: —Thomas Carew と Miltonを中心に—」
30	2005. 11. 25	稲田勝彦 (比治山大学副学長、比治山大 学現代文化学部教授、広島大学名誉教授) 「読みとジェンダー」

神戸女学院大学英文学会 会則

(1995年4月1日施行)

(2005年9月22日改訂)

(1) 名称

本学会を神戸女学院大学英文学会と称する。

(2) 目的

本学会は本学英文学科卒業生および大学院英文学専攻修了生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。

(3) 構成

本学英文学科卒業生、大学院英文学専攻修了生有志および本学英文学科教員、元英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。

(4) 活動

年一回、英文学会を開催する。
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英文学会その他の活動の内容を報告する。
その他。

(5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。

(b) 運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

内規

I. 大会での発表について

(1) 発表希望者は毎年7月1日までに、発表論文の簡単なレジュメと略歴を添えて、英文学科事務室まで申し込み、KCELS委員会で審査の上、決定する。

II. 維持費・参加費について

- (1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。
- (2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入する。
- (3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費などの経費の支出は、学科の会計委員が担当する。
- (4) (3)に関しては、KCELS専用の口座を利用する。

*今回、内規に一部変更があります。変更箇所には下線を引いていますので、ご留意下さい。

編集後記

本年は、英文学会発足30周年ということで、Newsletterの中で第1回大会以降の特別講演をご紹介させていただきました。少子化・グローバル化という大きな潮流にもまれ大学のあり方が問われる今、本学英文科も様々な試行錯誤を続けていますが、今後も本学会がさらに発展できるように努めていきたいと存じます。

多くの方々のご協力を得まして、今年も無事に大会を開催し、Newsletterを発行することができました。この場をお借りして、皆様に御礼申し上げます。

KCELS Newsletter 編集委員

(2005年度運営委員)

○泉川泰博 ○Cyndee Seton ○鶴野ひろ子 ○吉田純子
(ABC順)

KCELS Newsletter No. 21

編集発行 神戸女学院大学英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532

<http://www.kobe-c.ac.jp/english/kcels.html>

2006年3月発行

